

鯨 研 通 信

第 361 号

1986年1月

財団法人 日本捕鯨協会 鯨類研究所 〒136 東京都江東区大島3丁目32番11号

電話 東京 (683) 3621 (代表)



ヨウスコウカワイルカの資源

—中国科学者による保護対策の提案—

筑波大学医療技術短期大学部 神谷敏郎

中国原産三種の珍獣

中国大陸において前世紀後半に2種の大型獣が発見されている。フランスのダビット (A. David) 神父によるシフゾウ (1865) とジャイアントパンダ (1869) である。今世紀にはいりまたもや1種の珍獣が発見された。スミソニアン研究所のミラー (G. S. Miller, Jr.) によって研究報告されたヨウスコウカワイルカ (1918) である。1916年の冬に洞庭湖にカモ猟にでかけた米国の青年がカモならぬイルカを射止め、その珍奇な頭の骨を本国へ送り届けたことから、中国原産のカワイルカが世界に知られるようになった。

ここに紹介した3新種の動物達は、その後いずれもが絶滅の危機に追いついていった。「頭は馬に似て馬にあらず、蹄は牛に似て牛にあらず、角は鹿に似て鹿にあらず」という珍獣のシフゾウ (四不像) は狩り尽くされて、現在、野生種は中国から完全に姿を消されてしまい、わずかに世界各地の動物園で飼育、繁殖が計られ、やっと種が維持されている。

ジャイアントパンダについては周知の通りである。現在、パンダの生息数は約千頭と推定されている。中国政府の強力な保護対策の推進と、国際的な保護支援対応がとられた結果、最近になってやっと安定の徴候がみられるようになってきている。

ヨウスコウカワイルカ (*Lipotes vexillifer*) はどうかというと、沿岸の産業開発の目覚ましい発展にともなう、河の生態系が著しく変化し、その結果 *Lipotes* の生息数が激減してきていると案じられてきている。こうした中で今年 (1985) になって *Lipotes* に関する大変興味ある取材報告が、朝日新聞に2回にわたって掲載された。

5月26日の記事は、今年5月に中国で *Lipotes* の資源調査が南京師範大学と安徽省銅陵市政府との合同で実施され、銅陵市郊外の長江 (揚子江) において子連れの繁殖群が目視観察されたという明るい話題であった。同時に長江における *Lipotes* の生息数が近年急激に減ってきており、現在の推定では約200頭になってしまい、中国内ではパンダ以上に絶滅の危険性が指摘されているといった、驚くべき紹介もされた。

7月23日の夕刊には前回の続報として、5月の合同調査結果に基づいて、*Lipotes* の資源の回復を計る一つの手段として、銅陵市南部にある自然の水路に準自然・保護区の設営計画が検討されている、という特派員レポートが載った。陸生動物の禁猟区指定や自然保護区の設置は、アフリカの国立自然公園に代表されるように世界各地でみられるが、水生哺乳動物については、アメリカやアフリカで実施されているマナティ保護区設置につく計画であろう。カワイルカについては前例のない有意義な提案として注目される。

「ヨウスコウカワイルカ保護区」の設置計画の提案代表責任者は南京師範大学生物学系の周開亜 (ZHOU Kaiya) 副教授である。周先生については改めて紹介するまでもなく、30年来一貫して *Lipotes* の研究を推進してきておられる方で、本誌343号で報告したように、日中鯨学研究交流の中国側代表研究者である。81年に来日された折には鯨類研究所をはじめ各地の研究施設を訪問され、多くの研究者と交流を深められておられる。さらに鯨類研究所英文レポート34号 (1982) に「カワイルカ上科の系統、附鯨類の単一先祖説について」と題する興味ある論文を発表されている。現在は生物学部長の要職にあって、大学の運営面での責任者としても活躍しておられる。

最近、周先生より「*Lipotes* 保護のための準自然保護区の設置計画について」という英文の趣旨書（B5版7頁）を送っていただいた。*Lipotes* を単に中国のイルカとしてでなく、世界のイルカとして関心を

もってもらい国際的な理解と保護への支援とを訴えておられる周提案に答えて、再度、本誌を活用させていただきこの *Lipotes* 保護計画についての要旨を紹介をさせていただく。

ヨウスコウカワイルカを長江本流から

銅陵準自然保護区へ移動させ保護する研究計画

南京師範大学生物系

銅陵市白鬚豚保護協会 周 開亜

1. 分類学的位置

哺乳動物綱、鯨目、齒鯨亜目、ヨウスコウカワイルカ科。学名：*Lipotes vexillifer*

通称名：Baiji（白鬚豚）、Chinese River Dolphin（中国カワイルカ）

2. 生物学的資料

2-1 生活史の特徴

出生時の体長は90cm前後。雌雄とも体長2m前後で性成熟に達する。これまでに計測記録された最大の個体は、雌で体長253cm、体重237kg、雄で253cmと135kgである。体色は青みを帯びた灰色で、腹部は白色を呈する。非常に長い吻状の顎骨と、三角形をした背鰭をもつ。上下の顎骨には片側に32～36本の歯をもつ（総

数128～144本）。目は退化して小さいが、視覚はある。

2-2 分布流域

Lipotes は淡水イルカ科の中で独立した1科目に属する遺存種 (relict species) である。主に長江本流の中流から下流域にかけて分布している。分布域は1940年代後半までは19世紀末頃の分布とほぼ同じ状態であった。すなわち長江河口から1,900km上流の宜昌まで分布しており、さらに宜昌より30kmも上流にある名勝の三峡においても分布が確認されていた。1955年に *Lipotes* は杭州湾に流入している富春江の富陽やさらに上流の桐廬においても発見されていた。しかるに74年以後以降においては *Lipotes* は長江の枝城より下流域においてのみ観察されており、富春江流域からは完全に姿を消してしまった（図1参照）。

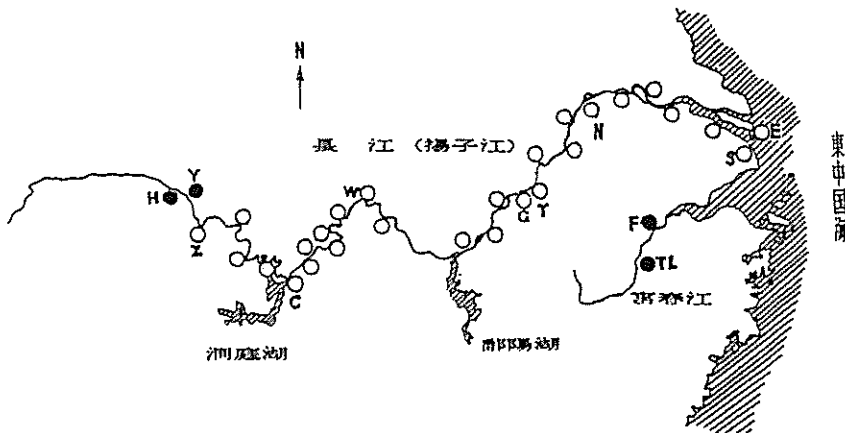


図1 長江（揚子江）および富春江におけるヨウスコウカワイルカの分布図。白丸は現在も分布している地点を、黒丸は30～40年前までは分布が確認されていた地点を示す。

C:岳陽 E:河口 F:富陽 G:貴池 H:黄陵廟
N:南京 S:上海 T:銅陵 TL:桐廬 W:武漢
Y:宜昌 Z:枝城

2-3 生息数

長江における *Lipotes* の生息数の調査は79年までは行なわれていなかった。79年から81年にかけて生態学的調査が実施され、長江中流から下流域にかけての *Lipotes* の生息頭数は、多く見積っても400頭どまりと推算された（この間の調査にはスイスや日本からの研究者の協力も得て実施された）。その後生息頭数は急激に減少し、現在では約200頭にまで減ってきてしまっている。したがって *Lipotes* は稀少な種類のイルカであって、緊急に具体的な保護対策を実施する必要性にせまられている。

2-4 生息環境

河川は人間の様々な活動の影響を強くうける。過去35年間にみられた沿岸の開発や産業活動の上昇、船舶の大型化、漁業活動の向上などは、長江における *Lipotes* の生態系に著しい悪影響を及ぼした。79年から81年にかけて、安徽省で発見された *Lipotes* の死骸の死因の50%は船のスクリーによるもので、37.5%が漁網にかかったり、漁民の偶発的な漁具の使用によって生命を奪われたものであった。さらに84年において、安徽・江蘇両省内で少なくとも13頭の *Lipotes* が漁具やスクリーによって殺傷されている。一方、長江における船舶の運行量は、最近の中国における経済発展の動向から推測すると、近い将来現在の2倍にも増加が見込まれる。さらに漁業活動も一段と活発に行なわれてきている。したがってこれら産業活動の発展は *Lipotes* の生息環境をますます悪化させていく要因となる。

3. 保護対策

3-1 法的規制による保護

Lipotes は現在、中国では国家保護動物に指定されており、種々の法律によって保護され、捕獲は厳重に禁止されている。また、これらの規制や保護の主旨を徹底させるために、*Lipotes* に関する解説書が刊行され、新聞による紹介記事、郵便切手の発行、映画による宣伝なども行なわれている。このような保護条令や宣伝活動を通じての保護の徹底が浸透してきているが、*Lipotes* の生存をおびやかしている二つの大きな要因である船の運航や漁具の使用までは、この保護条令によって規制することはできない。したがって *Lipotes* を取り巻く事態の改善は非常に困難である。

3-2 緊急保護対策の提案

現在、*Lipotes* の生存は非常に危機にさらされてきていて、もはやこのまま放置しておいては絶滅に迫りや

られてしまうであろう。長江における船舶の運行量の増加、漁法の進歩や活発化による生息環境破壊から *Lipotes* を緊急に保護する一つの手立てとして、*Lipotes* を本来の生息域である長江本流から隔離して、安全な場所へ移して保護と繁殖を計る必要があると考え次の提案をしたい。

4. 銅陵ヨウスコウカワイルカ

準自然保護区の設置

4-1 概要

準自然保護区設置の候補地は安徽省銅陵市南部の大通の長江本流にある、島状の巨大な二つの中州の間を流れている自然の水路の一部である（図2）。候補水路の長さは1,550m、幅は41~222mあって、84年の満水期に測ったところ水深は4~7.5mあった。したがって水路の総水量は42万~45万 m^3 である。長江の水位が海拔16mまで上がった時には、この水路は9.5~10mの水深にまで増水し、最大水量は159 m^3 となる。

自然のこの水路の両端を網で仕切って *Lipotes* を飼育する保護水路とする。この場合水深は年間を通じて5~6mに維持する必要がある。水路の水深は自然条件下で年間8カ月はいつもこのレベルの水深があるので、満水期の4カ月間はポンプを使って給水し、水深を調整保持する。

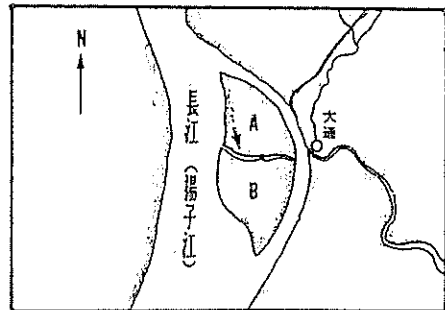


図2 ヨウスコウカワイルカ保護区設置候補地
長江に浮かぶ巨大な中州を南北に分ける水路（矢印）のうち長さ約1.5kmの東端と西端を網で仕切って、準自然保護区とする計画である。

準自然保護水路設置の候補水路は、現在、*Lipotes* が最も多く生息していると考えられる安徽省銅陵水区からわずかに数キロメートルしか離れていない。水路の自然環境は長江本流と同一条件に保つことが容易であり、水質も良い。船の運行、漁業活動も全くなく、

産業污水や家庭からの下水が流入してくる心配もない。ただ、餌としての魚類を年内を通して確保していくのには十分とはいえない。不足分は給餌してやる必要がある。このため餌料となる魚類を養殖するための施設を併設する必要がある。

保護区設置候補地の中州と大通の町との間には別の大きな支流によって隔てられている。このために保護水路だけの環境調整が容易であり、町の騒音の影響もほとんどない。総合的にみて *Lipotes* の保護に必要かつ理想的な自然環境を整えてやることができよう。

候補地の巨大な中州そのものについては、過去数百年来地殻変動は全くみられず、歴史的にみてもこの中州や周囲の河床も地理学的に非常に安定している。さらに、この自然の水路を利用して準自然保護区を設置したことによって、周辺の環境に悪い影響を及ぼす心配はないと考えられる。

本事業計画の拠点となる大通へは、高速道路や船舶の利用によって容易に往来できる。また、要員のための日常生活必需品も全てここで調達できる。

4-2 施設工事と研究計画

- (1) 自然水路を浚渫して、保護水路を建設し、水深を常時5~6mに維持するための水量調節に必要な関連機器を設置する。水路は長江本流側より摂水し、一定の速さで大通側へと流れるようにする。
- (2) 保護水路の脇に畜養プールおよび救護プールを別に設ける。畜養プールは主に新来のイルカを一定期間収容して、健康状態の調査と、人工餌料の餌づけの訓練にあてる。負傷個体や病変のみられるイルカは救護プールにて治療を施す。
- (3) 本計画実施の第一段階として、長江に生息しているスナメリ (Finless porpoise) を捕獲して、捕獲方法および畜養についての基礎実験を行う。スナメリ畜養の実績に基づいて *Lipotes* の捕獲、保護に着手する。一方、この間において負傷した個体や河岸へ乗り上げた個体についての保護についても努力し、保護水路で飼育するようにする。
- (4) 本実験で捕獲、保護された *Lipotes* は一定期間畜養プールに収容し、餌付けの訓練を施した後保護水路に放ち、人工給餌を続ける。初期段階では5~10頭の *Lipotes* を保護収容する。
- (5) 準自然保護区での畜養中、*Lipotes* の生態・行動学的観察を行う。特に群れの構成、聴覚交信、求愛行動などの分析をおこなう。これらの研究によって *Lipotes* の繁殖行為に関する基礎的な資料を得ることができよう。また、保護対策に必要

な多くの科学的情報を得られるであろう。

- (6) *Lipotes* の保護畜養と、それにとりまう多方面からの研究成果に基づいて、この準自然保護区での繁殖計画を促進させる。

おわりに

Lipotes に関する拙稿を本誌上で6回にわたり取り上げていただいていた(303、308、309、311、322、343号)。第1回は76年11月号で、6回目は最終回として82年1月号であった。最初は *Lipotes* の研究の歴史的背景の整理、標本所在の再確認ができたらと願って着手したが、同じ頃に中国では *Lipotes* に関する研究調査が開始され、その成果が続々と発表されるという好運な時期にあたっていた。このため *Lipotes* にかかわる諸問題を取り上げた続稿を重ねて紹介させてもらった。そして81年には念願の中国訪問が実現して、南京師範学院鯨類研究室での *Lipotes* に関する共同考察に従事することができた。最終回はこの時の日中鯨学研究交流の経過をまとめて報告した。

この間、形態学的考察を柱とした *Lipotes* の基礎的研究の進展と平行して、常に *Lipotes* の資源量が論じられ、案じられてきていた。今回ここに取り上げた周先生らの提案を統んで、改めて事態の一層の悪化を知らされた。周先生も言われているように、*Lipotes* が中国のみの稀少動物として存在した時代は終り、世界の動物界にとっての最重要保護動物として今後の経過を見守り、保護していかななくてはならない緊急事態に入ったと言えよう。このためにアジアの一国民として、また隣国の一構成員として私達が、*Lipotes* を守るために何ができ、何をすべきかを自省する時におかれている。

中国の工業化のスピードは非常に早く、今世紀末までに農工業生産額を四倍に増加させるとの長期展望が打ち出されている。一方、中国の公害の現状は、日本の十数年前、高度成長期のそれに近いと言われている(朝日新聞85年6月3日号)。濁れる長江中・下流域での環境保全が今後いかに改善、維持されていくかが、推定生息数が約200頭にまで減り、絶滅はもはや時間の問題であるとすらいわれてきている *Lipotes* の今後の運命を決定するであろう。 *Lipotes* が15年後に迫った21世紀を躍動のジャンプで迎えることができ、長江に親子連れの家族集団が悠々と遊び、世界の人々の目を楽しませてくれることを祈ってやまない。そのためにも、中国科学者が立案した起死回生策の実行とその成果が期待される。

下関のコマッコウ騒動

水産大学校 白木原国雄
下関市 白木原美紀

下関の海岸にコマッコウ母仔と思われる2頭が生きたまま漂着した。このような光景を見るのは何十年間も漁業を営み下関周辺の海に接してきた人達にとっても初めてのことという。地元では大騒ぎになり、その模様はテレビや新聞の地方版で報道された。幸いにも私達は洋上でこの鯨を観察することができた。種類の同定等に関する詳しい知見は得られなかったが、1つの情報として漂着鯨の若干の特徴、地元の対応ぶりを記すことは無意味でないだろう。

1. 鯨騒動の概要

下関市吉母漁協組合員の金子正美氏の話を中心に整理すると次の通りである。

1985年9月24日午前6時30分頃、下関市吉母海岸の波打ち際に生きたまま打上っていた2頭の鯨が発見された。このとき母鯨と思われる大きい方は相当に弱っていたという。金子氏は鯨を逃がすために尾羽にロープをかけたところ、2頭は沖へ泳ぎ出した。鯨の様子を見守るべくロープを離せなかった金子氏も鯨に引張られる形で泳ぎ始めた。洋上で2頭は接近しており、小さい方はあたかも乳を求めるような行動を示したという。

30~40分後、沖合の金子氏と鯨の所に同僚船が到着した。船に曳かれた鯨はいったん湾内の岩壁に繋がれた。そこで下関市立水族館の村上嘉明館長によりコマ

ッコウと同定された。その後鯨は沖合に連れていかれロープを離された。しかし自由になった鯨は再び岸に近づいてきた。漁師さん達は自分達の仕事をそっこのけにして救助作業を再開した。鯨が岸に近づくとこの作業は繰り返された。

2. 洋上からのコマッコウの観察

吉母漁協からの連絡を受けて、私達が現地に到着したのは午前10時30分頃であった。ちょうど最後の救助作業の直前で鯨が岸に近づいてきた時であった。早速、漁船に乗せていただき、鯨から数10mの近距離まで接近できた。

湾内は大変に穏やかで直ちに肉眼で1頭の鯨を発見できた。母鯨と思われる大きい方であった。先端がやや後方に曲がった背鰭があり頭部から背鰭までの黒色の背部を水面上に見せていた(写真参照)。体表はしわっほかった。動作は極めて緩慢に見えたが、この鯨本来の習性のためかあるいは弱っていたためかは不明である。船が近づくとやや背を丸めゆっくりと潜水しやがて他の場所に浮上した。この際、尾羽を出す様子は見られなかった。これを何回か繰り返した後、鯨は人間の足が底に届くような浅い砂浜に入り込んだ。そこで鯨は捕えられ尾羽にロープをかけられ、船で慎重にゆっくりと沖へ連れていかれた。私達は鯨を曳いていた船に乗り移り、目の前で鯨の側面まで見ることが

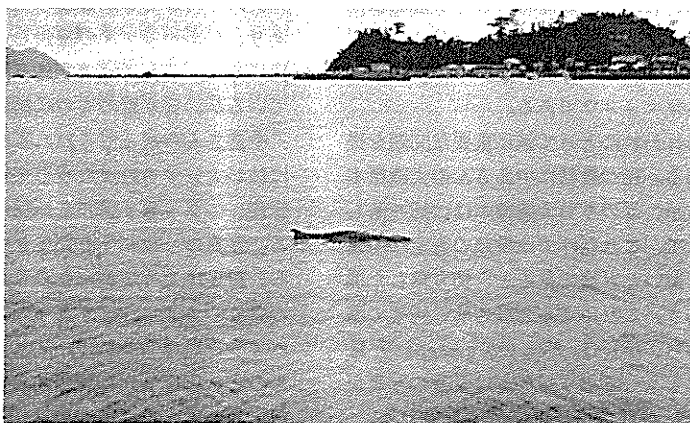


写真 下関市吉母湾のコマッコウ。1985年9月24日

できた。体長は3m以上と思われ、吻は突出せずいわゆる嘴はなかった。胸鰭前方に確認できた鎌状の白色帯がコマッコウの特徴を示していた。腹側は白色からピンク色を帯びていた。沖合でロープを解かれた鯨は直ちに潜水した。うねりが高く鯨を追跡することは困難だった。しばらく鯨の様子を見守っていた船はやがて港に向かった。私達は仔鯨を発見できないまま、午前中にいったん吉母を離れた。ところがこの後仔鯨は湾内に現われ一日中そこに留まっていたという。実際、その日の夕方と翌日の昼に吉母を訪れた際、仔鯨のみを肉眼で岸から見る事ができた。体長は1.5m前後と思われ、やはり頭部から背鰭までの黒色の背部を見せ、一見のんびりした風情で浮いていることが多かった。

コマッコウ属には *Kogia breviceps* と *K. simus* の2種がある (Handley, 1966)、漂着鯨がどちらに属するかを洋上観察から決定することは困難だった。

続・コマツコウ

鯨類研究所 大村 秀雄

約1年前の1984年12月号(358号)にコマッコウという題で、簡単な解説を書いたら、これに対して早速反応があり、御2人の方から貴重な資料を提供して戴いた。その1人は、御存知の中島将行さんで、まだ発表されていない2例について、資料を提供して下さい。それは(1)大磯標本。昭和38年9月1日捕獲。メス。体長287cmと(2)平塚標本。昭和42年4月13日捕獲。オス。体長180cmである。

もう1人の方は、石川県能登島町のとじま臨海公園水族館の西一広さんであって、昭和59年7月4日石川県羽咋市滝町で捕獲された、体長262cmのオスで、手紙によればオガワコマッコウである。

この両者ともわれわれにとって誠に重要な問題を提供しているのである。先づ最初に中島さんの大磯標本と平塚標本であるが、このうち大磯標本は、切り落した頭と背ビレだけで、これだけでは種類の査定は困難であるが、送って戴いた写真で見ると、切り落した頭の腹側の写真があり、これによると喉の所に何等の溝も認められないから、種類は *Kogia breviceps* と見ることができる。もう一頭の平塚標本は全身の写真があり、これよりこれも *K. breviceps* と判断される。

ところでこの平塚標本は誠に重大な意味を持ってい

ただし母鯨の体長は *K. simus* の最大体長2.7mより大きいように思われた。

3. その後のコマッコウ

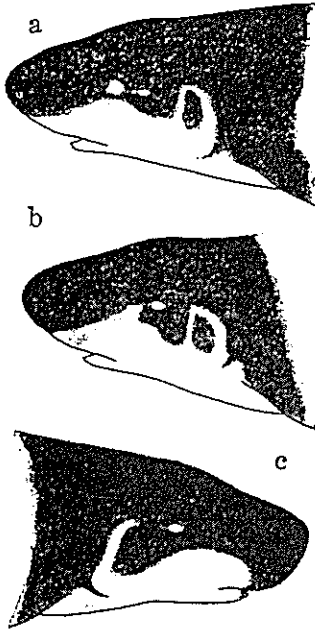
翌々日、吉母湾を訪れた私達の前にコマッコウは姿を現わしてくれなかった。吉母や近接の漁協の人達はそれ以来鯨を見ないという。彼女らは海底に沈んでしまったのだろうか。それも海にお酒を捧げて無事を祈った漁師さんの心が通じて、今頃どこかの海を元気に泳いでいるのであろうか。美しいこの海岸を舞台にした鯨騒動は2日間でその幕を下ろしたようだ。

おわりに、生きたコマッコウの珍しい姿を見る機会を与えて下さった吉母漁協に、貴重な情報を教えて下さった下関市立水族館にお礼申し上げます。日頃から御指導いただいている鯨類研究所大村秀雄先生に感謝の意を表する。

それは前号で書いた通り、山田さん(鯨研英文報告9号。1954)は、眼と胸ヒレとの間にある白斑(外国では括弧斑 bracket mark と呼んでいる)は、日本のものはアメリカ産のものとは異なっていると述べているが、それから30年以上経った今日でも、この問題はまだ解決していないと書いた。

この平塚標本は、この問題に新たな問題を提示したのである。参考までに第1図に山田さんの図を引用した。図中のaとbが日本の(太地産)のコマツコウであり、Cがハップスの報告したアメリカ産のもの白斑である。これでは文字通り括弧形(但し片方)をしているが、日本産のものは括弧形ではない。

中島さんの送ってくれた写真によれば、平塚標本では体が太分すりむけたりしているが、それでもこの括弧斑、つまり第1図のCが明らかに認められるのである。写真の一枚に「まだ生きていた」と書いてあるから、鮮度は上々であったのであろう。何れにしてもこの標本の本来の斑紋であったことに間違いはない。これよりみれば日本には、アメリカと同じ斑紋を持ったものと、山田さんの報告するように、これとは別の斑紋を持ったものの二つのグループがあることとなる。この原因はいろいろ考えられようが、問題はさらに観



第 1 図 コマッコウ属の白斑 (括弧斑)
 a、b 山田さん (1954) の報告
 する日本のコマッコウ
 c ハツブス (1951) の報告したもの

察事例を増やすことである。この属のものは、日本各地でぼつり、ぼつりと捕獲されたり、ストランドしたりしているに過ぎないから、このようなことがある場合は、必ず観察して記録して載くことが肝要だと思う。なおこの白斑はコマッコウ属の特性で、*K. breviceps*

にも、*K. simus* にも共通である。

次にのどじま臨海公園水族館の標本であるが、これは先方からの手紙に書いてある通りオガワコマッコウ (*K. simus*) であることに間違いはないと思う。コマッコウとオガワコマッコウの外形上の区別については、アメリカのレザーウッドらが表に纏めているので、これを第 1 表に掲げた。西一広さんから知らせて載いた事柄をこれに当てはめてみよう。

最初に歯の数であるが、連絡によれば上左右各 1 本、下左右各 9 本であるから、これは *simus* 型。なお歯の長さ 20mm、直径 4mm であるから、これも *simus* の範囲内。

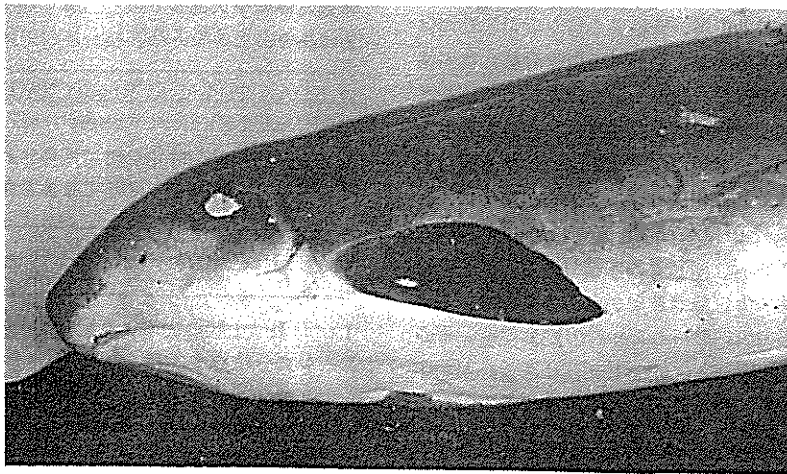
喉の部分に、本数には正確にはわからないが、5 本ぐらいの短い溝があり、これだけで *simus* と断定することができる。

体長は 2.62m で、これも *simus* の範囲内である。

脊ビレの位置及び高さをプロポーシオン測定から計算すると第 2 表の通りとなる。この表で見ると、背ビレの高さは体長の 8%、位置は上顎の先端より測って、体長の 40.8% の所から 56.1% の所にあり、体の中央部にありと言ってもよい。

以上の診断から、この標本はオガワコマッコウ *K. simus* であることに間違いはない。なおこの診断の結果から、レザーウッドらの診断表は誠に有用であると言うことができる。

ところがこのレザーウッドと私は数年前にちょっとした論争をしたことがある。それをここに紹介しよう。私は 1984 年に白木原、伊藤両女史と共著で、コマッコウ属 *Kogia* の論文を書いたことがある。事の起



第 2 図 北太平洋の真ん中で大目流しによって捕獲されたコマッコウ
 (鯨研英文報告第 35 号掲載)

りは、この時使ったコマッコウ *Kogia breviceps* の写真であった。この写真は私どもの論文（英文報告35号、1984）の第1図に示したものである。この写真を数年前に、この論文を発表する前に、クリスマスカードに使用したことがある。そして説明として Pygmy sperm whale、*Kogia breviceps* と書いて送ったのである。ところが彼レザーウッドは、これに直ちに反応して、お前の判定は誤りだ。喉の所に溝 Creases があるから *K. simus* に間違いないと反論して来た。それで早速いろいろな本を調べてみたが、この溝のことが書いてあるのは彼等の本（第1表に示した）だけであった。そこでこの特徴は彼が最初に発見したものであろうと考えた。

それにしてもこの写真は、あまりはっきりしていないが、溝があるようにも見えるからと考えて、腹側からみた写真と、頭蓋骨の写真を同封し、かつこの鯨は北太平洋の真ん中で流し網によって捕獲されたものであり、その際網の目の中に首を突っ込んで、ぎゅうぎゅう絞め上げられたことを附記したのであった。これによって納得したとみえて、重ねては反論して来なかった。どうもこの写真は期せずして、彼レザーウッドを落とし穴に落とし込んだような感じがして、誠に相済みなかったと思っている。

次に骨のことをすこし述べよう。頭蓋骨は前に書いた通り、ハンドレイがコーヒー・カップという誠に適切な表現を使っている。頭蓋骨を上から見た時、後縁が、丸く深く落ち込んでコーヒー・カップ状になっているのが *K. simus*、なっていないのが、*K. breviceps* である。例外なくこの通りであり、これだけで2種を簡単に識別することが出来る。

次に脊椎骨数であるが、脊椎骨の数を勘定したのは今までに約10例あるが、この両種で脊椎骨数に差があるか、ないか、それらを論じた論文はなかった。そこで私共3人が1984年に書いた論文では、これを採り上げてみた。先づこの2種に区別する必要があるが、それはそれぞれの著者に相談せず、こちらが勝手に、これは *breviceps*、これは *simus* と区別したものもある。その要点は第1表と、頭蓋骨の写真である。但し御自分で両者をはっきり区分されていた方のものは、その分類に従った。その結果 *breviceps* では52—54、*simus* では55—57と出た。ところがこれに反するものが若干ある。

どこかにもう1例ないかと捜したら、そうだ鴨川シーワールドの鳥羽山さんの所に標本が一つあった筈だ。あれではどうだろうと考えて、先づ頭蓋骨の写真を送って貰った。上記のコーヒー・カップの状況か

ら、種類は簡単に判明した。そこで脊椎骨数はこれくらいであろうと手紙を出したら、それに極めて近いとの回答があった。これに勇気づけられて、上記の数字を発表したのであった。

最後に貴重な資料を提供して下さいの中島将行さんと西一広さん、それに脊椎骨数で御厄介になった、鴨川シーワールドの鳥羽山照夫さんに厚く御礼を申し上げます。

第1表 コマッコウとオガワコマッコウとの間の外形上の区別 (S. Leatherwood らによる*)

コマッコウ <i>K. breviceps</i>	オガワコマッコウ <i>K. simus</i>
歯	
左右の下顎に 12—16 本 (稀に10本—11本)。上顎に歯なし。歯長く (40mm まで)、太し (直径 9mm まで)。	左右の下顎に 7—12 本 (稀に13本)。歯小さく先尖る。時として上顎にも左右各 3 本までの歯あり。歯の長さ30mm以下、直径 4.5mm以下。
喉	
喉の部分に溝なし。	短かく不規則の溝あり
最大体長	
3.7m まで	2.7m まで
背ビレ	
低い (体長の 5% 以下が普通)。体の中央部より後方にあり。	高し (体長の 5% 以上) 体の中央部にあり。

* NOAA Technical Report NMFS Circular 444

第2表 石川県羽咋市滝町で捕獲されたオガワコマッコウの測定値 (のとじま水族館測定)

測 定 カ 所	測定値	体長に対する%*
1. 体長 (上顎の先端より尾ビレの分岐点まで)	2,620 ^{mm}	100
8. 上顎の先端より背ビレの前部基部まで	1,070	40.8
12. 背ビレの基底長	400	15.3
13. 背ビレの高さ	210	8.0

* パーセントは筆者が計算